

**[成果情報名]「させぼ温州」のわい性台木ヒリュウを使った着果および高品質安定栽培技術**

**[要約]**「させぼ温州」は、わい性台木のヒリュウを使うことで、樹容積がコンパクトとなり、着果が安定し隔年結果性が縮小する。併せて、果実糖度が向上し、果頂部の突起が小さくなり商品性が向上する。

**[キーワード]**させぼ温州、ヒリュウ、隔年結果、糖度、果頂部突起

**[担当]**長崎県農林技術開発センター・果樹研究部門・カンキツ研究室

**[連絡先]**（代表）0957-55-8740

**[区分]**果樹

**[分類]**指導

**[作成年度]**2012年度

---

**[背景・ねらい]**

「させぼ温州」は、樹勢が強く隔年結果性が高い。また、年次による収量差があり、単収が確保されていない。また、着果が不足すると糖度の低下や果頂部の突起が発生し品質向上が難しくなる。このような強い樹勢のある品種をコントロールするには、わい性台木であるヒリュウが利用されており、高糖度系ウンシュウを中心に導入されている。そこで、ヒリュウ台を使った「させぼ温州」の樹体特性の解明と着果安定および品質向上技術について検討する。

**[成果の内容・特徴]**

1. 樹容積および樹高は、ヒリュウ台がカラタチ台より有意に小さい（図1）
2. 収量および着果数の年次変動は、ヒリュウ台がカラタチ台より小さい（図2）。
3. 6～9年生の積算収量は、1樹当たりでヒリュウ台はカラタチ台より少なく、樹容積1m<sup>3</sup>当たりでは、ヒリュウ台はカラタチ台より多い（図3）。
4. 糖度は、ヒリュウ台がカラタチ台より有意に高い（表1）。
5. 果頂部の突起指数は、ヒリュウ台がカラタチ台より有意に小さい（表1）。

**[成果の活用面・留意点]**

1. ヒリュウ台は、着果を始めると樹容積拡大が緩慢となるために、初期の樹容積および樹高を確保するよう芽かき等を行う。
2. ヒリュウ台「させぼ温州」の10a当たりの植栽は、SS防除体系で139本（1.8×4.0mまたは1.6×4.5m）、動噴防除体系で185本（1.8×3.0m）～222本（1.8×2.5m）を目安とする。
3. シートマルチ栽培の被覆時期の違いによる果実品質や、ヒリュウ台の着花および着果性向上要因について、さらに調査する必要がある。

[具体的データ]

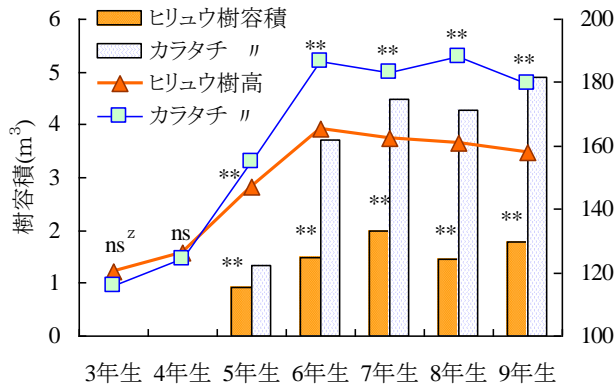


図1 「させぼ温州」の台木の違いによる樹容積および樹高の推移(2006～2012年)

<sup>z</sup>\*\*はt検定で1%水準で有意差有り、nsは有意差無し

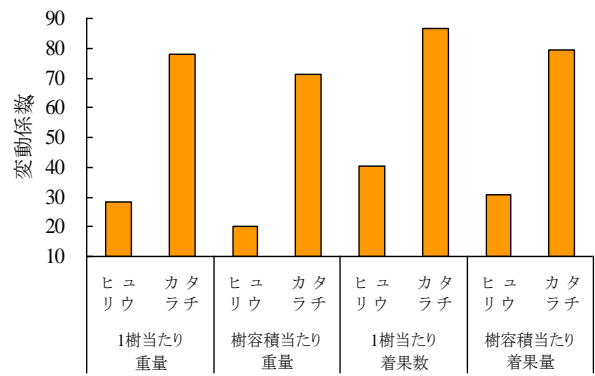
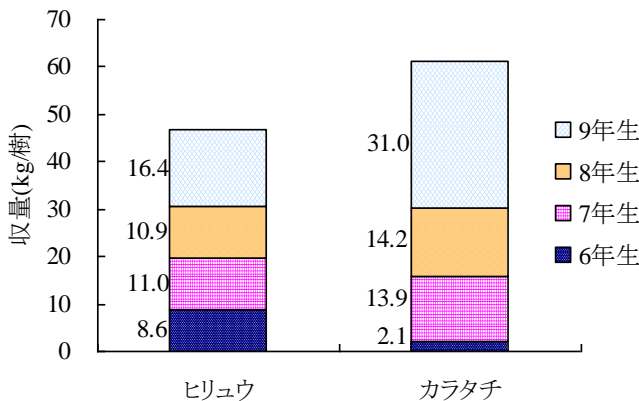


図2 「させぼ温州」の台木の違いによる収量および着果数の変動(2009～2012年)

<sup>z</sup>変動係数は6～9年生で算出

(1 樹当たり収量(kg/樹))



(樹容積当たり収量(kg/m³))

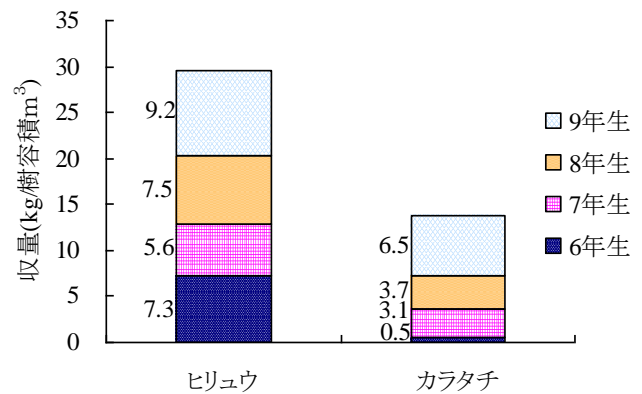


図3 「させぼ温州」の台木の違いによる1樹および樹容積当たりの収量(2009～2012年)

表1 シートマルチ栽培<sup>z</sup>での「させぼ温州」の台木の違いによる果実品質(2010～2012年平均)

区分	1果平均重 (g)	糖度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)	果皮 a値	浮皮果 <sup>y</sup> 発生指数	果こう部果皮 亀裂発生指数	果頂部 突起指数
ヒリュウ	127.2	14.2	0.95	29.6	25.9	2.8	27.6
カラタチ	155.9	12.0	0.93	29.6	29.3	2.6	47.6
有意性 <sup>x</sup>	ns	*	ns	ns	ns	ns	*

<sup>z</sup>シートマルチ栽培は7月下旬に透湿性のある資材を被覆

<sup>y</sup>浮皮果、果こう部果皮亀裂、果頂部突起発生指数は無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階評価、指数は(Σ(発生程度別果数×発生程度))/(3×調査果数)×100で算出

<sup>x</sup>\*はt検定で5%水準で有意差有り、nsは有意差無し

[その他]

研究課題名：長崎ブランド「させぼ温州」の特性を発揮する栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2012年度

研究担当者：荒牧貞幸、古川 忠、林田誠剛